

■ 編集だより

編集後記

今年の第110回精神神経学会学術総会では参加者が8,000人を超え、史上最高を記録したようです。どの会場でも講演に熱心に聞き入る、幅広い世代の聴衆が目立ち、新しい知見や現在の課題などが多くの精神科医に共有されるよい機会として、学会がうまく利用されている印象を受けました。また、参加者数だけでなく、プログラムを見てもその領域の広がり・多様性に驚くばかりです。例を挙げると、シンポジウムのタイトルを見ても、不勉強の身には具体的なイメージがすぐに浮かんでこないものが少なからず目に留まりました。研究の対象や用いられている方法論を併せて考えると、臨床医学の1つの分科で、これだけ広汎な対象領域をカバーする分野を他には思いつくことができません。大学を卒業した頃の頃、精神科と迷った挙句に神経内科を選んだ同級生から、「精神科の病気の数は両手で数えられるくらいなので、少なくとも診断に迷うことなどないだろうから楽でいいね」と皮肉混じりに言われたことを思い出すと、隔世の感があります。しかし、精神医学が人間の心や行動という極めて複雑な対象を扱う以上、現在のこうした広がりはおく自然なことと思えます。

このような精神医学の対象の広がりには、サイエンスの進歩としての各分野の深化が当然入ってくるでしょうし、精神医療に対する新たな社会的要請が高まりつつある領域、例えばストーカーの治療問題やネット・スマホ依存、脱法ハーブなどの問題も含まれることになるでしょう。実際、地方で診療してさえ、こうした問題の解決を求めて家族が相談に来院されることが、それほど稀なことではなくなっています。多忙な臨床医が、これらの問題にどこまで対応すべきかという議論については意見が分かれるところでしょう。しかし、社会的要請が増している現状があり、精神科医が全く無関心で済ませられる問題でもないように思います。こうした新しい知見や社会的課題などの現状についてタイムリーに知るには、学会に参加して関連の講演を聴講することが手取り早いでしょうが、前述の通り、精神神経学会の学術総会の規模になると、多数の興味あるプログラムが同時進行することになり、聴講したい講演を残念ながら聴き逃すようなことも起こりうるでしょう。そういう点で、本誌では、一部ではありますが、学会シンポジウムの内容を特集として掲載する企画が続けられています。ライブで聴講してその場の雰囲気味わうことができないというデメリットはありますが、その分、能動的に読んで頂く機会を提供することで、少なくともその領域の概略を掴むことお手伝いできるのではと考えています。興味をもたれたら、引用文献を通じてさらに理解を深めて頂ければ一層結構なことです。

逆に、学会でまだまだ議論されていないような重要な問題（具体的な問題として指摘することはできませんが、精神医学の発展を考えると当然そういう問題がたくさんあってほしい）や、貴重な臨床経験に関する症例報告など、読者の先生方から積極的にご投稿頂ければ、と思います。

最後になりますが、平成25年12月から編集委員として編集作業に携わせて頂いております。読者の皆様に掲載論文の主張や意義が伝わりやすいような構成を取って頂けるよう、レビューの過程を通して論文著者の先生方のお手伝いができれば、と考えています。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。